

あなたは生きることに情熱を燃やしていますか？
元祖・レインボーヘアーが語る、過激でレインボーな人生！！

志茂田景樹

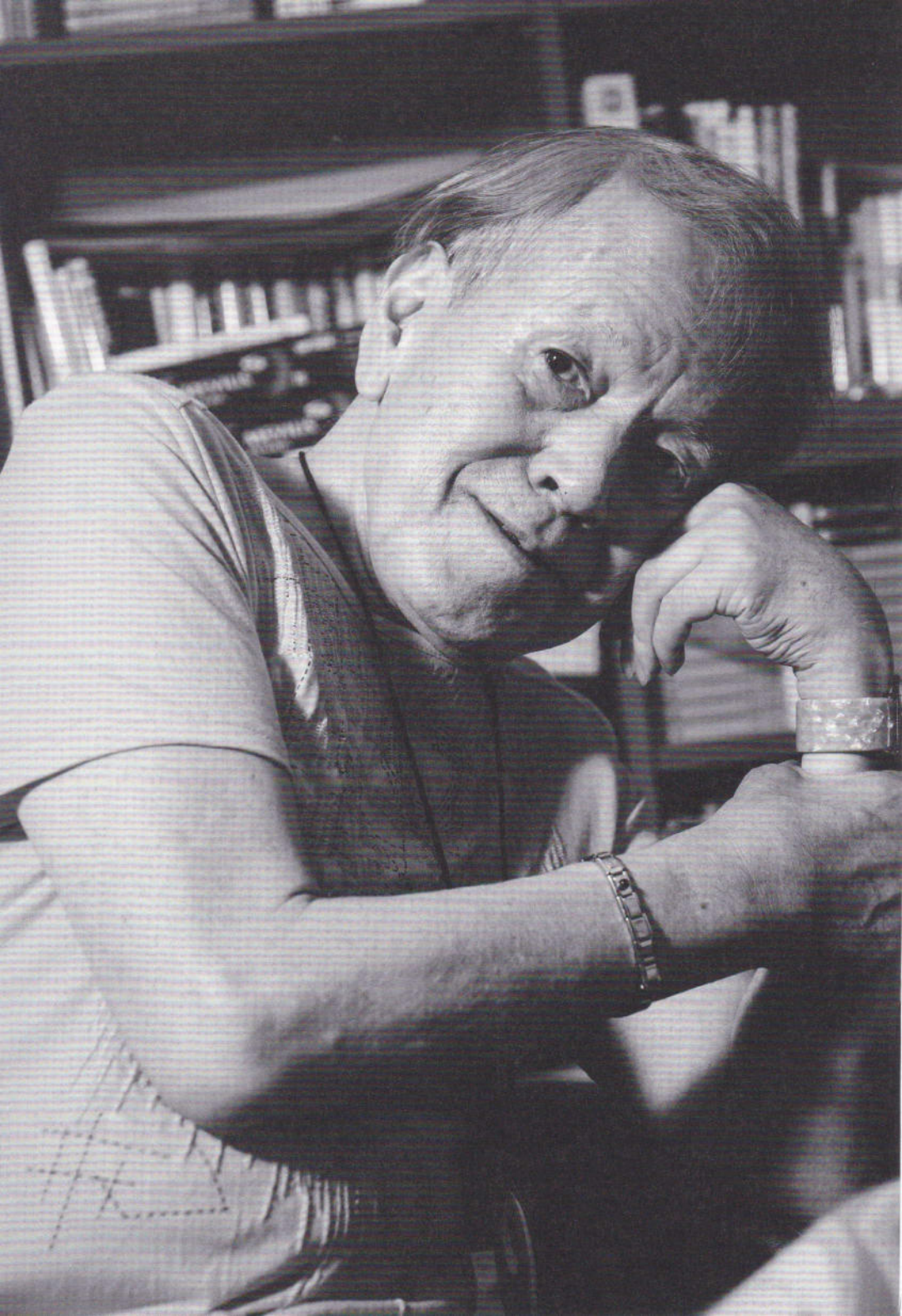
〔小説家〕

「何事においても
“貫いている人間”を見ていると
情熱を燃やしてますよ。
ただの惰性やクセだけで
貫けるなんてとんでもない」

収録日：2017年6月30日 撮影：タイコウクニヨシ 聞き手：湊澤壮典

志茂田景樹（しもだ・かげき）

1940年3月25日生まれ、静岡県伊豆市出身。小説家。東京都立国立高等学校を卒業後、中央大学法学部政治学科に入学。卒業後、20種類以上の職を転々として29歳のとき小説家を志す。1976年『やっこ探偵』で、小説現代新人賞を受賞。1980年には『黄色い牙』で直木賞を受賞した。その後はジャンルを問わない多彩な世界観の作品を次々と発表し、多くの読者から支持を集める。また、独特で奇抜なファッションセンスが注目されてテレビ番組やファッションショーなどにも出演、タレントとしても活動の幅を広める。1999年に妻とともに『よい子に読み聞かせ隊』を結成し、全国各地で読み聞かせ行脚を行なうなど、現在も幅広いジャンルで活動が続けている。



「人間死ぬまで何かをやっているはずなんで、ここで区切って引退みたいなのは嫌いなんですよ」

——景樹さんは、服はどこで買われているんですか？

景樹 これはいろいろだね。ボクはブティックなんかで一時期は覗いた頃もあったけど、めんどくさくなっちゃってね。そういうところを歩くときはもうお店が閉まっている時間だし。だから女房がボクの感覚で買ってきてくれたり、もらうものもあるんですけどね。そういうのも全部、ボクだったら履くだろう、身につけるだろうっていう感じで（笑）。

——やはり奥様は景樹さんの感覚を熟知されてるんですね（笑）。現在、奥様とは『よい子に読み聞かせ隊』を結成して全国で絵本の読み聞かせなどの活動をされていますよね。

景樹 はい。

——これまでも数多くの活動をされてきて、最近だとツイッターでの悩み相談も毎日のように返信されていますが、そういった熱ってどこからくるんですか？

景樹 うーん。どっからっていうか「自然に自分の身体から」と言うしかないですけどね（笑）。人間死ぬまで何かをやっているはずなんで「ここで区切って引退」みたいなことは嫌いなんですよ。死ぬまで何か関心があることはやっていきたいんです。好きなものは続いていますけども、随時新しいものには関心を持っていますね。続いているってことは途中で関心が薄れてしまったってことなんでしょう。

——随時新しいものを取り入れる。ツイッターも昔はなかったものでもすもんね。

景樹 そうですね。要するに携帯電話のこんなに小さくて細長い窓の向こうに大海が広がっている。まあ、大海ですからいろいろな魚類が住んでいるでしょうが、140字以内で書いたものに対してこっちが予想もしない反応があるっていいですね、ツイッターという小さな発信口と言っているでしょうかな？ これを通して自分がまだ垣間見ることのなかった世の中を見ることができんじゃないかと。それはボクの好奇心を充足させてくれると同時に、きつと未知の、自分自身の知らなかったことが知れて広がるんじゃないかなと思ったわ

けです。

——やはり好奇心が旺盛なんですね。

景樹 どちらかというと「作家的な好奇心」と言っていると思います。出版物というのが媒体としてあるわけですね。版元があって、著者があって、印刷されたものが下流に流れていく。しかしツイッターというものが現われて、これまであった世界を急激に広げた。しかもこちら側が発信するだけでなくダイレクトに受け取り手にもなれるというね、そういうやりとりができる。未知の人が反応してきたらその未知の人に触れることができる。そういうところに躍動感を感じるんですね。

——躍動感、ですか。

景樹 年齢を重ねると若い人たちとの格差が生まれてくるじゃないですか？ その格差というのは価値観とか、物の考え方なんですけど、「それでいいのかな？」と思ったんですね。年齢が全然違う人たちというのはボクにとっては人間の新しい種みたいなものなんです。そういう人たちを「よく知りたい」「理解してみたい」という気持ちで強いんじゃないかな？ 居酒屋なんかに行っても、なんとなくそんな気持ちで飲ん

るので。だから若い人たちと自然に話をしている場合が多いんですよ。

——「新種」っていう表現がとてもおもしろいですね。でも、それこそ景樹さんがテレビに出てきたときって、髪の色だったりファッションだったりもあって「新種だ」と思う人が多かったと思うんですよ。

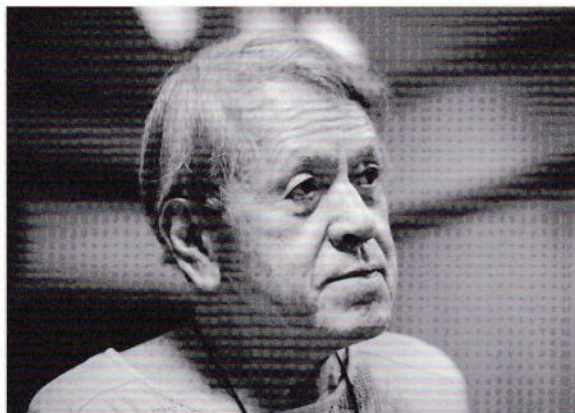
景樹 うーん。まあそのときに、たとえば60、70、80の人たちがどう思ったかという、ほとんど否定的な見方ですよ。道ですれ違って罵声を浴びせたりとか、そういう人が多かった。

——罵声ですか……。髪を奇抜な色にしたのはいつ頃からですか？

景樹 うーんと、47、48の頃じゃないですかね。初めはね、ブルー一色だったんですよ。当時はマニキュア液っていうのはいいものはアメリカの輸入品だったんですね。『Tarzan』という雑誌に「アメリカの最先端のマニキュアを染めてみませんか？」っていうのが載ってたんです。当時は金髪が茶髪が多くて、ブルーの色をしている人はいなかったんです。ちょっとやってみたくなって思ったんです。当時としては珍しかったのでインパクトはあったと思

います（笑）。

——ブルー一色は相当インパクトがありますよね（笑）。



景樹 いまの時代はけっこう髪を染めている人は多いですよ。でもまだまだ、いまの若い人たちを見てなんだかんだって言う人

間はあるかもしれないですよ。でもボクは見かけはあまり気にならなくて、話してみても「どういう価値観なのかな？」とか「どういう経験があるのかな？」って、そういう部分に興味がいっちゃうんですよ。要するに外見は「いいよ、それで」と。「じゃあ、この若い人はどういうことを考えているのかな？」っていう部分に好奇心がいく。

——興味があるのはその人の中身ってことです。

景樹 たとえば銀行員がボクのような髪にしたら、勤めていられないとは思うんですよ（笑）。

——銀行員はレインボーの髪色はダメかもしれませんね（笑）。

景樹 でもね、銀行員だっていまの若い人たちはボクらが20代のときに抑制できたことを抑制できないと思うんですよ。まあ、それだけ世の中がある意味では開放されてきているんですよ。

——そうですね。昔に比べると開放されてきていると思います。

景樹 いまはカツラでもなんでもよくできたのがあってね、カツラをかぶってる若い人もいますよね。だから自分が気持ちよく

過ごしているという面では、いまの若い人たちはとても柔軟性を持っているんじゃないかな? 銀行に勤めた人は、銀行がどういうところか、どうしなきゃいけないかっていうことはちゃんと心得ている。

——景樹さんの若い頃の人たちよりも柔軟性が高いですか?

景樹 うん。ボクは高校のときに映画研究会にいたんだけど、映画を作るってなったら「俺が演出をやる! 監督だ!」「いや、俺がやる!」なんて対立する場合があるんですよ。でもね、いまの人たちはちゃんとお互いの個性をわかっているんですよ。「俺がこれをするよ」「じゃあ俺はカメラをやるよ」「そしたらボクが音声やるね」っていうふうにたちまちにクルーができる。ボクらの頃はどうしてもケンカになるんだ(笑)。

——それは凄くわかる気がします。お互いの持ち場を取り合わないですね。

景樹 うん。柔軟性と賢さがある。でもね、本当はもっと自分を出してもいいんだよ。なぜか自然に暗黙のルールとか了解があるんですよ。「俺も出すぎないようにするから、



おまえもほどほどにしとけよな」っていう。「それがみんなの気分がよくなる方法だからな」っていう暗黙の了解。それがすぐに成り立つちゃう。ボクらの時代はそうじゃなかった。居酒屋で飲んでてもすぐにケン



カが始まっちゃって、「表に出ろ!」なんて言ってる(笑)。でもそのあとに仲直りするんですよ。血をダラダラ垂らしたあとに(笑)。そういうことがいまの若い人たちはまったくないですよ。ケンカしてるの

を見たことない。

——たしかに「表に出ろ！」っていう会話を聞かなくなりましたよね。

景樹 そうでしょ？ ああ、それでね、ボクは相撲がけっこう好きだったんですよ。

——へえ。相撲ですか。

景樹 最初はラジオで聴いていたんです。テレビで相撲を観るようになるのは大学生の頃からです。一度ね、中学2年生か3年生だったと思いますけど、初場所の千秋楽を観に蔵前国技館まで行ったんです。朝6時台の電車に乗ってね。その日は大雪で、たどり着くまでに凄く大変だった記憶があります。当時、「悲劇の横綱」って呼ばれていた吉葉山っていう相撲取りがいてね、ボクはファンだったんです。その吉葉山には鏡里っていうライバルがいた。鏡里は吉葉山よりも一足先に横綱になったんだけど、その2人が結びの一番だったんです。でも、結びの一番までってけっこう時間あるんだよね。それで好奇心が強いほうだから支度部屋へ行ってみた。

——えっ、支度部屋に入って行ったんですか？（笑）。

景樹 好奇心があるほうだからね。支度部

屋に入って行ったら、親方みたいな人がいて「入っちゃいけん！」って言われちゃって（笑）。

——そう言われると思いますよ（笑）。

景樹 それでもうひとつのほうに行ったら今度は怒鳴る人がいなかったんだね。入って行ったら大きくて胸毛がもじやもじやな朝潮太郎っていう力士がいたんですよ。初めてこんなに大きい人を見たからね、「大きいなー」って思ったよ。そこには付き人みたいなのがいて、ちやうどマワシを締めているところだったんです。

——それは相撲ファンとしてはうれしい場面ですね。

景樹 それで支度部屋の小上がりの座敷みたいなのところに、大皿にまんじゅうがいっぱい盛られてたんです。お腹が空いていたせいか、それをじっと見ていたら、そこにいた名もない力士が「食べていいよ」って言うから、ひとつ食べて、あと2つ手を持って支度部屋を出しましたね（笑）。

——アハハハハ！ いったい何をしに行ったんですか？（笑）。

景樹 フフフフ。当時はね、けっこうみんなのんびりしてたんじゃないですか？（笑）。

——常に好奇心で動いていますね（笑）。やはり幼少期からいろいろなものにご興味があったんですか？

景樹 ボクは女きょうだいの中で育ったんです。じつはボクには昭和20年に20歳で戦死した15歳年上の兄がいたんです。長男が健在だったら、一番上と一番下が男で、間が2人女ということだったんですね。上の姉とは8歳違ったんです。8歳差の姉と弟って、その年齢以上に大人と子どもみたいな感じになるんですよ。だからこっちから見れば、8歳も上ですから、こっちが中学生になれば向こうはもう大人ですから化粧もしていました。だから女の人の化粧とか着ているものに対する興味っていうのは自然とあったんですよ。

——へえ。いまのスタイルにもつながってくる話ですね。

景樹 昔から恥ずかしがり屋なのに茶目っ気があるところがあったんです。親戚なんかが集まるとね、壁にハンガーでかかっている姉のブラウスなんかを羽織って、宴会をしているところに「ワッ！」なんて言っ飛ばし出したりしてたんです。そんなことすると小遣いにくれたりする人もいたので（笑）。

——アハハハ！でも、それを楽しんでくれたのが大きいですよ。

景樹 育った環境があるかもしれないですね。肉体的とか自分の意識的なことじゃなくて、ジェンダーレス意識はあったのか、っていう気はしますね。それとボクはね、空想をするのが好きでした。

——空想ですか。

景樹 小学生のときにみんなで空き地なんかで野球をやるんですね。ボクは加わることもあったんですけど、なんとなくお付き合いって感じで（笑）。

——お付き合い（笑）。

景樹 ボクは耳が悪かったり、身体が弱かったせいもあるんですけど、離れたところで本を読んだり、空き地の隅にあるブランコに乗ったりしてひとりで遊んでいるほうが好きだったんです。そこでよく空想をしていました。空想をしているとバットでボールを打つ音、みんなの掛け声もまったく聞こえなくなるんです。そして気がついてみたら「晩ごはんよ」っていきなり母親の声です。

——へえー。完全に自分の世界に入り込むんです。

景樹 そうです。冬に近いときだと暗くなってるんですね。そういうことはありました。

——どんな空想をするんですか？

景樹 小学校5、6年だと大人の読む本を読んでたんですけど、ジュニア版とか漫画もあって、アレクサンダー大王とか英雄ものを読んでたんですね。それで「アレクサンダー大王がもしも日本に来て、富士山を見たら「凄い！」とかなんと言葉が発するんだろなあ」なんていう空想はしていましたね。

——物語の続きを自分で考えていたんですか？

景樹 そうです。そういうことが好きだったんです。自分で作った空想の世界に入るのが。

——まさに景樹さんの小説の世界ですね。

景樹 あとは犬と友達だった時期があったかもしれない。

——犬が友達ですか？

景樹 飼っていた犬と一緒にずっとついてくるんです。犬って、原っぱでひとりぼっちでいるときもそのへんで勝手に休んでて、ときどきこっちの様子を見ながら付き合っ

てくれますからね（笑）。

——アハハハハ。とにかくひとりしているとかが多かったんですね。

景樹 そうですね。

——その頃は何か憧れていたものってありましたか？

景樹 あのね、大学に入ったときに目指したものが映画俳優だったんですよ。高校のときに中平康監督の『狂った果实』という映画を観たんです。長門裕之とかいろいろ出たんですけど、その中でもとくに印象に残ったのが石原裕次郎。なんか浮き上がって見えただけです。なんとなく役者って感じじゃなくて浮き上がってた。その浮き上がり方が客席から観ても親しみやすい感じで強く印象に残ったんですね。

——へえー。

景樹 『狂った果实』の1、2本あとに『幕末太陽傳』っていう時代劇を撮ってるんです。時代劇だから当然みんなヅラを被ってるんですけど、石原裕次郎だけは「なんかヅラが似合わないな」っていう感じがしたんです。

——それだけ石原裕次郎さんが特別な存在だったんですね。

景樹 大学に入ってエキストラをやるんですけど、そこで裕次郎とかにも会ってるんですよ。映画で観ていると裕次郎が本当に背が高く見えた。でも、実際に会ってみるとそんなにボクと変わらなかったんですね。179センチぐらいだったと思う。小林旭が175センチくらいで。日活の主役級だとそんなもんだと思う。

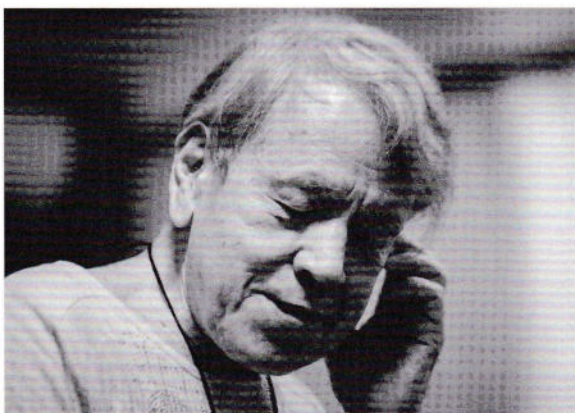
——景樹さんも当時の人にしては身長が高いですもんね。

景樹 ボクも同じぐらいの身長だったね。高いなって思ったのは、新東宝のハンサムタワーズのひとりだった菅原文太。菅原文太は180センチくらいあったんじゃないかと思う。映研でいろいろ海外とか日本の映画監督を知ったけど、それよりもスクリーンに出たほうがいいなっていうふうに思ったんですかね。スクリーンに出るほうに憧れてた。

——それで俳優を志したわけですね。

景樹 当時、映画が全盛期のブームを引きずっていたので、映画俳優の養成所みたいなのがいっぱいできてましてね。千駄ヶ谷にあったその中のひとつに入ったんです。それで大学と両方通ってたんですけど、大

学の方はサボってましたよね（笑）。
——やはり好きなものに熱中しますからね（笑）。



景樹 養成所に行ってますとね、いくらでもエキストラの口が来るんですよ。それでけっこうエキストラ生活をやっていました

ね。今日は調布、明日は祖師ヶ谷大蔵、次は大泉だとか。大船に松竹の撮影所があつてね、当時は屋内で撮るシーンはみんな撮影所でやっただけです。東映だとニューフェイスっていうのがあつて、写真と経歴書を書いて送るんですけど、凄く倍率でしたな。一度応募したんですけどね、到底ダメ。書類選考で落ちますから。どこの映画会社もニューフェイスに万単位で応募してくる時代ですからね。

——まず俳優になること自体が厳しいですね。それでも俳優を目指すわけですね。

景樹 それはね、エキストラに何回か行ってるうちに監督に目をつけられて、「これ言ってみろよ」なんてひとつ台詞をもらってだんだん台詞が増えていって、いつの間にかパイプレイヤーになってたなんてケースも当時はけっこうあったんです。だから現場には行つたほうがいいなと思って思ってたんです。

——ああ、オーディションに受からなくても現場に行けばそういうチャンスがあるわけですね。

景樹 そういうことです。その頃、間もなく始まった『若大将シリーズ』っていうの

があつたんです。

——加山雄三さん主演の大ヒットシリーズですね。

景樹 それでロケをやるっていうので行っ
たんです。加山雄三たちのヨット部員たち
がヨットに乗っているのを湖畔を歩いてた
青大将グループが見つけて、「アイツがいる
から泳いで行ってヨットを乗っ取れ！」な
んて叫ぶ。ボクは青大将グループのほうに
いたんですけど、みんなドボンドボン湖の
中に飛び込む。現場はもの凄い熱気の中で
撮影してますから、ボクも思い切ってドボ
ンって飛び込んだんです。でも、ボクは耳
が悪かったから泳ぎができませんでした（笑）。

——泳げないのに飛び込んだわけですね。

景樹 ねえ。こっちも必死ですから。でも
「これは大変だ」と思っ、すぐに岸壁に
しがみついて陸に上がった。そうしたら助
監督に凄い怒鳴られてね。それでやめまし
たね（笑）。

——えっ、やめたっていうのは俳優を目指
すことをですか？

景樹 そうですね。

——それも凄いですね。その助監督の一言
で。

景樹 ええ。そのあとは職を転々とするよ
うになるんですけどね。そのうちに作家志
望が芽生えてきたというかね。

——まさに好奇心の塊ですね。でもその後、
40種類以上の職業を経験されているんです
よね？（笑）。

景樹 いろいろやりましたね。職を転々と
するようになってからまた本を読むように

なつたんですよ。

——小学生の頃はけっこう読んでいらした
わけですね。

景樹 そうですね。わりとまっていたもの
で、小学校5、6年のときに大人の本を読
んでましたね。高校に入ってからほとんど
読まなくなつたんですが、大学のときはベ
ストセラーみたいなものとはときどき興味を



惹かれて読んでいました。地方に出張みたいな仕事が多かったので、移動時間に読むようになったんです。小説雑誌、純文学の雑誌はけっこう買って読んでましたね。それで新人賞受賞作みたいなのを読んだときに、「これくらいなら書けるんじゃないかな？」っていうことで作家志望が芽生えたんです。

——これくらいなら（笑）。

景樹 まあ、もちろん簡単にはいかなかったんですけどね。初めて応募したのが二次予選を通ったので、「このぶんだと2、3年でいけるかな？」なんて思ってた。でも実際には7年かかった。29歳のときに初めて応募をしまして、36歳で小説新人賞をもらったので。

——7年ですか。それでも本当に賞を獲られたのは凄いですよね。

景樹 そのあとは順調でした。順調というか、新人賞くらいだとそれだけで消えちゃう人もいます。でも、そのあとに注文があつちからもこつちからも来た。1年も経たないうちに長編小説の注文も来てね。書き下ろしで書いて、それはベストセラーじゃなかったけど、そこそこヒットした。

1年経って気がついたら、小説だけで食べるようになってたっていうことなんですけどね。

——それと小説家を志したくらいの時期にご結婚をされていますよね？

景樹 そうだね。2年ぐらいの同棲生活があつて結婚式を挙げたのは28歳ですね。だから初応募のときはもう結婚してたってことです。新人賞を獲るまでに子どもが2人生まれていますから。

「結局、今って何かが壊れるとMをむきだしにする時代になつてる」

——えーと、景樹さんはご結婚されている間に、別の女性のところに行く時期があるじゃないですか。

景樹 ああ、家を出てたってことね（笑）。

——はい。でもいまは奥様と一緒に活動をされています。

景樹 べつにまあ、そういうことなんですけどね（笑）。どこかで女房との絆が切れたかつたんでしょ。そういう意味では向こうも切らなかつたっていうことです。うーん……なんていうのかな、離婚とかそう

いうことを考えるっていうのとはちよつと違う感じなんです。まあ、いまは簡単に離婚をしちゃう時代ですからね。

——とくにいまはそういうことに変に敏感な時代ですよ。

景樹 ボクらの頃だつてけっこう離婚は多かったんですけどね。でも、意識がいまとは違うのかな？ 何もなかった時代。お互いに苦労して、こちらから見れば女房に支えられてきた。やつぱり強い絆になつていたと思います。まあ、ボクは糸の切れた風みたいところはありますけれども（笑）。

——自由にどこへでも飛び回る（笑）。

景樹 女房と結婚した頃っていうのは何もなかった時期で、四畳半1部屋のアパートに住んでたんですけど、何もなかった。あ、いちおう六畳だったかな？

——まだ小説家の芽が出ずに苦労されていた時代ですね。

景樹 秋葉原で50000円で買った白黒の中古テレビと、ちやぶ台と、ほんのいくつかの鍋なんかがあった。女房と2人で近くの居酒屋なんかに行って、部屋に帰つてくるとね、なんかガランとしているわけですよ。

——賑やかな居酒屋から帰ってくると余計にそう感じるのかも知れませんね。

景樹 それで女房にね、「いま、この部屋にはなんにもないけど、きつとここにはボクらの宝が埋まってるんだよ」なぐんてね！
(笑)。そんなこと言つて気持ちを癒したりしていたんです(笑)。

——いい話ですね。

景樹 まあ、そんな時代の相手とね、こつちが遊び呆けて酒を呑んだくれてる時代に知り合つたもうひとりの相手。何もなかったときに一緒に苦労した女房との絆を切るということではできなかったというか、「これまでのは全部忘れて、これから好きなように」というような気持ちにはなれなかったんでしようね。

——奥様はずつと待つていてくれたわけですよ。

景樹 そうですね。たまには帰つたりしてたときもあつたんですよ。1日くらい。資料とか必要なものが家にあつたので。

——でも、またどっかに行くわけですよね(笑)。

景樹 ええ、まあ(笑)。うーん。離れて暮らしているとね、「ああ、きつと待つてゐるんだ

な」つていう想いがボクの中にあるんですね。

——奥様の想いを感じていたんですね。

景樹 もし、向こうがサバサバとしていて、「離婚をしよう」と言つてきたらすぐに応じていたと思います。去る者は追わず。追わないほうがその人のためでもあるし、こつちのためでもあるつていう考え方もありますから。でも、そうじゃなくて「待つてゐる」。待つてゐる以上は絆を断ち切るつていうことは、やや非道なことをするのと似ているところがある。ボクは情というものを潰せない人間なのかもしれない。それとボクはそういうことをロマンチックに考えて消化してしまう部分がありますので。

——ロマンチックに消化するというのは？

景樹 「ああ、今日はいいい月夜だなあ」つて思いながら公園で一服をしているんですよ。ボクは月を見ながら「向こうもどこかで同じ月を見ているんだろうな」つて思うんですよ(笑)。

——ロマンチックですね！ いいようにロマンチックに消化していますが(笑)、ボクは好きです！

景樹 同じ地球にいますからね。同じ星にいますつてことは同じ星で生まれていますか

ら、どっか断ちがたいところがある。いまは断ち難いものがどんどん切れている時代なのかなつていう気がしています。

——自分の保身にだけ走つて、人の幸せを願わない人が多いんじゃないかと感じますね。

景樹 ああ、そうですね。ボクが今の時代に感じるのが、たとえば恋愛をしてフラれたときに、男でも女でも「自分自身が耐え難い」つていうだけの引きずり方なんです。フラれたことは悲しいことではあるけれども、向こうの気持ちが離れていつてしまったなら仕方がないと思えばいい。フラれてしまつて泣きながらでも、「じゃあ、幸せになつてね」とどこかで祈る。ボクらの時代はそんなようなことがあつた気がします。

——ああ、その時代の歌の歌詞とかもそういう内容が多いですよ。相手の幸せを祈るといふか。

景樹 そうだね。いまの若い人の「恋愛を引きずつてゐる」つていうのは、よく聞いてみると自分の都合だけ。むしろ相手に対して「よくも自分をこのようにな目に遭わせたな」つていうことで憎しみを抱く。未練

があるなんて言ってるけど、よく聞いてみると未練じゃない。

——憎しみです。

景樹 うん。憎しみを持つての引きずり方だから断ち切れないんです。自分をフった憎いヤツ。でも、そのときはそう思っても一度冷静になって考えてみればいい。そして相手のことをふと思いついてみて、「もう遠くに行ってしまったとしても、健康で幸せであってほしい」とそう思えばいいんです。

——一度でも好きになった人ですもんね。

景樹 ボクは先ほど「若い人たちは柔軟でうまくやっている」って言いましたが、ある意味では冷淡で自己中心的になっているんですよ。「ダメならさっさと別れればいいんだから」っていう意識がどこかにあるような。

——たしかにそういう感じもあるかもしれないね。

景樹 自分が相手に求めるもののハードルをけっこう高くしちゃってるんですね。相手が自分に何を求めているんだろう？ っていう想いが浅いんです。要するに自分だけですべてを考えてしまうから溝ができてしまう。そうするともう修復不可能なところま

で行っちゃいますよね。フったフラれたは関係ないんです。たまたま出会った男女が恋をして、結婚に至らなければいいかは



別れる。どちらかが出した「きっかけ」「ひきがね」ってことなんだよ。恋愛っていうものはそういうものだと思うんですけど。

いまは幻想の部分だけが肥大し過ぎちゃってますよね。

——恋愛に限らず、いろいろなものが未来永劫に続くと思っている人は多い気がします。

景樹 そうでしょ。その幻想が破れた瞬間に何が起きるのかっていうとね、被害者意識なんです。つまり覚悟が足りない。「仕方ないよね」っていうことが言えない。

——そうかもしれない。

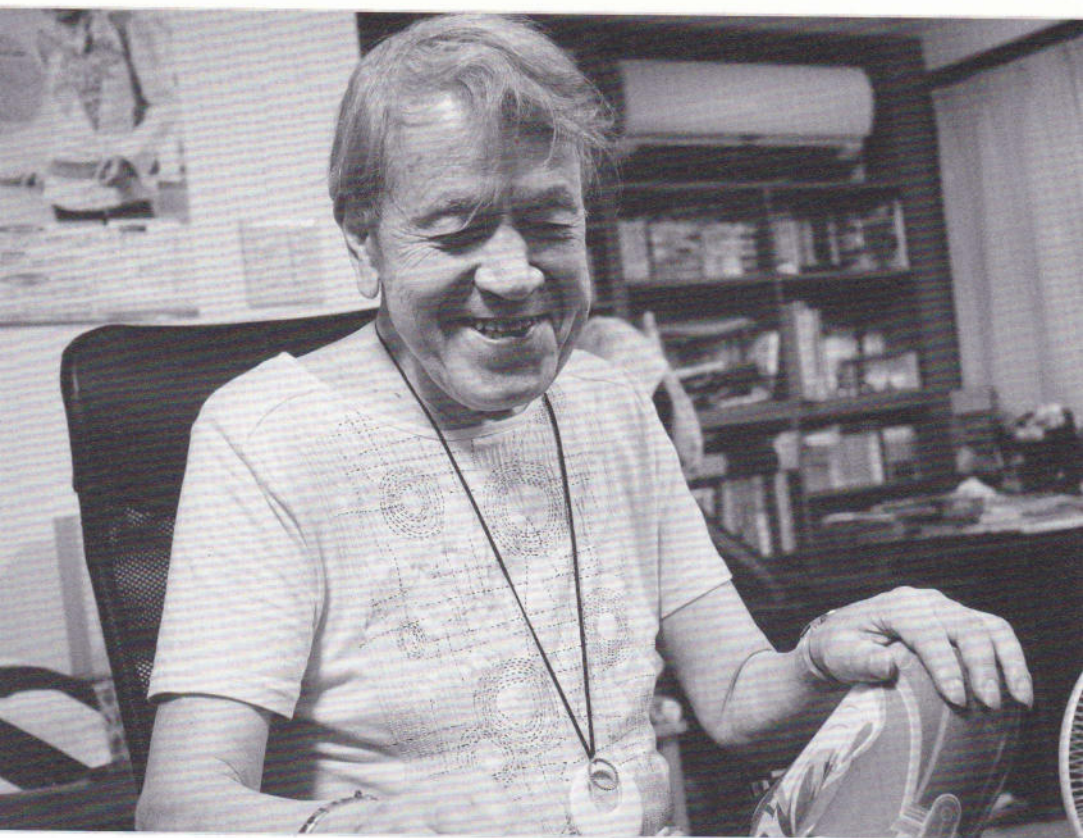
景樹 恋愛って相手がいなくちゃできないんだよ。だから根底のものとしてフィフティ・フィフティなんです。それなのに自分がいい気持ちのときにだけ「幸せだ、幸せだ」と言ったりそういう思い込みをする。相手があつての恋愛だということをわきまえようとしないところがありますね。そういう意味ではMの時代になつてののかなと。

——Mの時代ですか？

景樹 これがいい意味での個人主義だったらいいますけど、結局いまって何かが壊れるとMをむきだしにする時代になつてる。

——Mのむきだし。

景樹 たえば誰かが死んで相統争いをするときとか、そういうの多いですよ。



——譲り合わないんですね。

景樹 だからそれは免疫のつけ方なんですよ。その力がない。折り合いをつけるっていうことは、やっぱり相手の立場も認めなきゃいけない。免疫力がないから必死に自分を守ろうとしちゃう。それで傷を負ったら本当は自分にも責任があるんですけど、「傷を負わされた」っていう被害者意識の心が膨らんじやってる。これは悩み相談のいろんな端々にも見える。「これはエゴだな」って思う。でも、そんなことを本人に言っても傷つけちゃうので言いませんけども（笑）。

——そこはしっかりその人に合った言葉を選んでアドバイスするわけですね。

景樹 そうですね。相談してきた人間にとっていい方向になるような回答しかしません。相談してきた人間ってやっぱり傷を持っているので。その傷をうずうずさせるような、落ち込むような答えはしらないですよ。

——優しいですね。

景樹 フフフ。本当はね、ビシッと一発与えたほうがいいっていうのはわかるんですけどね、少しでもその気持ちを和らげたい、癒したいっていう感じですかね。北方謙三

みたいだね、「ソープに行け!」っていうのが一番簡単でいいですけどね(笑)。

——アハハハ! あれは名言ですよ(笑)。

『リンダリンダ』、歌いましたね。

飛んだり跳ねたりしながら

歌って、けっこうヒロトさんも

凄いなって(笑)。

——景樹さんが「笑っていいとも!」にご出演されていたときって50歳くらいなんですよ(笑)。

景樹 1990年が50歳ちょうどですから、あれのレギュラーになったのは52歳ですね。50歳前後からバラエティ番組の出演オフアーが増えたんですよ。『元気が出るテレビ!!』とか、あつちやこつちやから来ました。——「笑っていいとも!」で甲本ヒロトさんと『リンダリンダ』を歌っていたことがありましたよね?

景樹 ああ、はいはい。『リンダリンダ』、歌いましたね。飛んだり跳ねたりしながら歌って、けっこうヒロトさんも凄いなって(笑)。いまでもブルーハーツは好きでよく歌ってるんですよ。AKBも乃木坂も櫻

坂も歌いますけどね。

——幅広いですね(笑)。

景樹 フフフ。AKBだとよく歌ってるのは、『心のプラカード』。3年前ぐらいの曲ですけどね。乃木坂だと『おいでシャンプー』。櫻坂だと『二人セゾン』っていうのがけっこう歌いやすくて好きです。まあ、歌いやすかったって、自分が歌いたいように歌って歌いやすいついていう意味ですか(笑)。

——最近、ラップもやられてるじゃないですか? ゴルラップ。

景樹 ああ、そうです。自作の詞ですね。——凄いかっこいいんですよ。音楽もカッコいいですし、ずっと詞を叫んでるのがいいんですよ。もはやラップじゃなくて完全な新ジャンルだと思うんですけど(笑)。

景樹 フフフ。でもあれ、ちょっと飽きちゃったんで(笑)。

——アハハハ! 飽きたんですか(笑)。

景樹 もう2〜3度は断わってますね(笑)。最近ではラップじゃなくてシャysonライプをしていますよ。——シャysonもやってるんですね(笑)。凄いです……。

景樹 まあ歌詞さえ書いちゃえば簡単に歌えますよ。へへへへ。

——やはり小説もツイッターも作詞もそうですが、オリジナルで何かを発信していくことが好きなんですよ。

景樹 はい。そういうことなんです。歌詞で自分の想いみたいなのが伝わればなあっていう感じで。だから、ゴルラップの『太陽は近く爆発する』なんてのは好きですよ。

——本当にまだまだお若いんですね! 景樹さんがこの時代に足りていないと感じるものは何だと思いますか?

景樹 ああ、そうですね。「カオスと情熱」だと思っています。いまの若い人たちはとても賢くて、ある意味では凄くシンブルなんです。だからカオスを嫌うんです。

——なるほど。

景樹 要するに「混沌とした中から自分が何かを築き上げていくもの」、あるいは選り出すものを嫌うんです。当然それを嫌うからには何か欠けている。つまり「情熱」が欠けています。知識と情報量の蓄積は多い。そうなたらすぐコンピューター的に「何かやりたいときはこうやればいい」という手法を導き出す。そういうやり方は

いまの若い人は凄く達者です。要するにボクらの若い頃は「何かやりたい」って思い立って、やるんだけどうまくいかなかった。「じゃあ、これはどうだ」ってやるけどダメで、そうやってものがくことも一種の青春の証だったんですけどね。いまの人たちはそういう意味ではもがかないような気がするんですね。

——一番の近道をすぐに発見するのがうまいかもしれません。

景樹 ネットの世代なので当然かもしれませんが、情報が大量に蓄積させて、さらに変な情報は捨てていつてるんですね。だから意外とまともな情報をいまの若い人は持っていますよ。その中からずっと自分がやりたいことを抜き出す能力があります。ボくらみたいな紙の世界で物語をいろいろしてきた人間と違って、ゲームなんかが当たり前で育った世代です。意外とゲームって見ると単純でしょ？ それでダメだったらリセットして息を吹き返すこともできる。あとはいろんなアイテムを手にしてそれを使って遊ぶ。あれで十分楽しいんです。でも、ボクラはそれを見て「なんだかなあ」っていう感じですけども。要するに「楽し

む」「ワクワクする」っていう感覚を若い人がどういうところで得ているのかっていうことです。ボクらの頃の要素とはちよっと違うところがあるんですけどね、だからそれもちよっとおもしろい感覚だなとは思ってるんです。

——否定的ではなく、おもしろいと思ってる感覚があるんですね。

景樹 ええ、おもしろいですよ。

——景樹さんは時代が変化しても、いまだにずっと同じ髪型や服装、スタイルでやられているじゃないですか。

景樹 はい。まあ、カラーの具合もあつて微妙には変わりますけどね。そういう意味ではやっぱりあれですかね、「ごく自然に貫いている」っていう部分はあるのかもしれないですよ。

——ごく自然にキープしている。

景樹 ええ、まあ。じつは最近脚を痛めていて、冷やしちやいけないので普段はタイツの上から脚を温めているんですが、せっかく取材にいらっしやるので、いまはそれを外してタイツなんです。

——これもまた素敵なタイツですよ。この服装こそボクが思ってる通りの志茂田景

樹さんです！（笑）

景樹 でも、それはある種のサービスピス精神なんです。「貫く」っていうのもけっこう情熱があると思います。要するに当たり前になればなるほど、こっちもそれが当たり前になっちゃう。当たり前になると刺激がないもんでね。だから脚を冷やさないってことよりも、「貫く情熱」がそのときボクの中で勝っているわけです。だから何事においても貫いている人間を見ると情熱を燃やしますよね、本当。ただの情性じゃダメ。それがクセになつてから貫けるかっていうと、とんでもない。ボクはそんな気がしています。

